
リリス -戒-

氷魚出都奴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリス - 戒 -

【Nコード】

N1168BA

【作者名】

氷魚出都奴

【あらすじ】

この世界には全ての災いの元とされる存在があった。

それはリリスと呼ばれる少女。

何百年と昔から人類の敵とされ、発見され次第処刑され続けてきた。

そう、現在も継続されている。

リリスは処刑されても時を経て、この世に同じ姿で蘇る。

蘇れば見つかかり、見つかれば捕まえられ、捕まえられれば処刑される。

そして、また、この世に蘇る。

この悪循環が永きに続く世界で、勇者と呼ばれる人物がいた。
名はレディン・クレイオ。

人類を脅かす魔族を打ち破り、弱きを助ける英雄。

だが、彼は知りえてしまった。

リリスの本当の姿を。

そして、勇者は反逆者の烙印を押されながらもリリスを護る。

これは過去にあった、リリスに拘る一つの物語。

The Fugitive (前書き)

これは昔「夢鑑堂」というHPで掲載した物を、多少の誤字脱字修正したものであり、内容は掲載当時のままです。

The Fugitive

朝日がその姿を現すには早すぎる時刻。

山間の森林を、紅い松明の灯りが幾つか駆ける。

それを持つ者達は、草木を掻き分け獲物を躍起になって追いかける。現在この山では、山狩りが行われている。

実行者はこの山を含め二つ山向こうに村を構える者共だ。

追っている獲物は数日前より村の付近で何度か目撃されており、今日ついにその姿を捕捉した。

宵の口より始まった山狩りだが、長時間休憩もろくに取らずに獲物を追い掛け回している為、山歩きになれた彼らといえど疲労は頂点に達しようとしていた。

始めは20名を越える大所帯だったが、一人また一人と村に帰ってゆき、

今残っているのは4人だけとなっていた。

交わされる会話はなく、息も切れ切れない呼吸音だけがあたりを支配する。

獣じみた瞳が漆黒の闇に獲物が飲み込まれないように見開かれていた。

その距離わずかに10m・・・獲物を捕縛するのはもはや時間の問題であった。

松明を握る手がにわかには沸いた緊張感から汗ばんでくる。

山狩りの基本は大人数で獲物を囲むように包囲し捕縛する。

だが、4人という人数ではそれも不可能である為、獲物が弱るまで執拗に追い立てるのである。

相手に休む暇を与えず、常に緊張という精神的抑圧をうながし、心身ともに消耗させる。

始めは走り回っていた獲物も徐々にその速度は落ち、いまでは普通に歩いている程度だった。

だが、ここで機を焦って一気に飛びかかろうなどとは考えてはいけない。

それは4人ともわかりきっていることだった。
窮鼠猫を噛む。

この諺に喩えられる様に追い詰められた獲物は最後の全力を振り絞って抵抗する。

その抵抗は凄まじく怪我人を出さないわけにはいかない。

それは彼等ほど山に慣れた者達ならば身に染みていることだった。

一番安全なのは相手が最後の抵抗をする力も気力も失う時なのだ。

逸る気持ちを殺し、相手の消耗加減の様子見、徐々に距離を詰めてゆく。

獲物までの距離はあと5m。

すでにその歩みは無いに等しい。

一步、また一步と疲労により鈍重になった足を一本づつ気力を振り絞りながら進む。

何度となく自重すら支えきれなくなって倒れ込み、そのたびに力なく立ち上がる。

獲物にはもはや前に進むことしか頭には入っていなかった。

少しでも速く、少しでも遠くに離れることだけを考え、あとは前に進むことに全力を注いでいるからである。

そんな獲物の様子を見ていた四人はこの機を逃す事は無い。

と、お互い目で合図を送ると獲物に全速力で襲い掛かった。

その瞬間、獲物を見据えていた瞳がゆらりと浮き出す影を映した。

月明かりを背に受けるその姿はまさに影そのものだった。

彼らは何事かと獲物から一瞬だけ意識がそれてしまった。

何かが月光を煌かせ一閃した。

それが白刃だと理解したときには4つの首が胴体から離れ宙に舞っていた。

事切れたことすらわからぬかのように体は二歩三步と前に歩み出で、糸の切れたように倒れた。

影は剣を一振りし、微かについた血糊を飛ばして柄に収めた。

振り返ると獲物として追われていた者が限界を超えた疲労の為に意識を失って倒れていた。

元は白かった服は土やら何やらで薄汚れており、至る所に鉤裂きができていた。

そこから剥き出しの白い肌は木々の間を走り抜けるたびに引掻いたのか蚯蚓腫れをおこし、

出血している個所も少なくはない。

今はくすんだ茶色の長い髪も一度洗い上げればとても綺麗なものになりそうだった。

影は躊躇いも無く近づくと優しく抱き上げた。

まだ顔に幼さを残した少女は整った眉を顰めさせ息も絶え絶えにその緩やかな胸を上下させる。

呼吸は苦しそうだが、別段大怪我を負っているわけでもなく、ゆっくりと養生すれば元気になるだろう。

影は優しく少女の顔を見守りながらそのまま山を降りていった。

朝日が木々の間から木漏れ日となって顔に降り注ぐと少女は優しい眩しさにゆっくりと瞳を開く。

寝起きの気だるさを心地よく感じながら身体を起そうとしたとき、全身に小さな痛みが走った。

その痛みで自分の置かれた立場を瞬時に思い出し、辺りを見渡す。

辺りには動くものは無く朝のひんやりした空気が漂うだけであった。その冷気に少し震えを憶え、今まで自分が毛布に包まっていたことに気がついた。

見れば昨日ついた引掻き傷などが治療され包帯まで巻かれているではないか。

どう考えてみても昨日の状況からは今の状態に到底結びつかない。

自分は追われてから倒れて意識を失う所までしか記憶が無い。

追われる身となってから数百年。

寝込みを襲われる事はあっても介抱されることなんて今まで一度も

無かった。

一体誰が、何が目的で・・・少女の頭の中ではそんな考えがぐるぐると回っていた。

見た目15、6歳のこの少女は世界中の人々にリリスと呼ばれている。

本名は誰も知らない。

知る必要も無い。

見つけ次第抹殺されるのだから。

Revelation of god

彼女はおよそ4百年前、人々の前に現れた光の神から『この世の全ての災いの源』だと告げられた。

光の神は彼女をリリースと呼び、彼女を滅する事ができれば、全ての災いは無くなるだろうと続けた。

この頃は世界中で疫病が猛威を古い、更に異常気象の為に飢饉もしばしば起こっていた。

皆が皆信じたわけではなかった。

年端も行かぬ少女を殺せば災いが無くなるなどと。

しかし、自分達の信じる神が告げたことが間違っているとも思えない。

そして一部の信心深い人々が強行で少女を処刑することに踏み切った。

その日のうちの彼女の処刑は終了した。

せめて一思いに、と斬首刑が選ばれた。

すると、どうだろう。

その年は飢饉も疫病も無く平和な日々がつづいたのだった。

しかし翌年、再び世界に飢饉や疫病が再び猛威を振るい始めた。

やはり一人の少女を生贄にしたぐらいでは災いなど無くなるはずが無い。

人々は1年前に情け無用に処刑された一人の少女に申し訳無いと思いを始めていた。

だが、ある日その少女が村に帰ってきたのだ。

確かに一年前処刑された少女だった。

村人達は戦慄した。

確かに処刑は行われ、墓まで用意して埋葬したのだ。

だが、こうして目の前に少女はいる。

人々は理由がわからなかった。

彼女の知識は確かに生前の彼女のものだった。

疑うこと無き本人だったのだ。

彼女についての査問会議は徹夜で行われた。

少女は気がついたらこの村の付近にいたのだといいはるばかり。

埒があかなくなり時間も無駄に周り始めようとした時、一人の青年がつぶやきを漏らした。

少女は魔女なんじゃないかと。

その一言が人々を虜にした。

それならば納得がいく。

魔女ならば怪しい秘術で不死身にもなるだろう。

そして少女が魔女ならば帰ってきた目的は一つ。

自分を殺した村人達に復讐するためしかない。

こんどは神様は関係がない、村一致で処刑は実行される。

理解不能な出来事に猜疑心が後押し、その狂宴は再び行われた。

今度は村人を守るため、世界の災いを無くすための正義の行為として。

魔女だと判断された少女は生きてそのまま焼き殺された。

やはりその年は飢饉も疫病も流行らず平和な日々がつづく。

しかし、今度は4年が過ぎた頃。

三度災いはおとずれた。

世界中で疫病が猛威を奮い、抵抗力の無い老人や子供はすぐさま死んで行く。

4年前の比ではないそれは人々にひどく絶望を抱かせた。

その噂は風の便りで運ばれてきた。

少女を処刑した村の青年が出稼ぎ先の隣町で少女を見たという。

それから暫らくして少女は三度めの処刑を受けるのだった。

気がつくとき生き返っており、見つけられると殺される。

繰り返される凶事は次第に地域を広げてゆき数百年たった今では世界中で追われている。

もはや深い意味を知り少女を殺す者はいない。

農業、薬学、医学・・・文化水準が発達した現在では、数百年前にいわれた災いなどすでに滅している。

リリースを追う者達は罪に為らない罪を犯す愉しみに浸りたいが為に追いたてる。

およそ人の生活では経験できない「やってみたいができないこと」が出きるのだ。

世界中の人々が、神が、認めてしまった存在してはならないモノ。暴行、殺人、虐待、およそ人間の理性が禁忌とするものがリリースになら許される。

それどころか仕留めた者は半ば英雄扱いであった。

この甘露を求めて世界中のどこか壊れた者達はリリースを追いたてる。ただ己が欲望のはけ口のために。

そんな気が狂いそうな生活が数百年続いている。

もう、何百死んだらう。

もう、何百蘇ったたらう。

もう、何千許しを乞うたらう。

もう、何万泣き叫んだたらう。

だが、現実是不変ならない今日も追いかけられる。つかまれば乱暴され殺される。

幾度となく蘇るとはいえ、死ぬことの痛みや恐怖まで無いわけではない。

だがしかし、気が狂うことも、ましてや安らかに死ぬことも出来ない。

ただ、出来るだけ殺されないように身を隠しながら生き延びるだけだ。

そんな自分が今は不思議な状況に陥っている。

こんな身の上の自分を追手から逃がし、傷の手当てをし、毛布をかけてくれる。

とても信じる事が出来なかった。

だがしかし、数百年ぶりに胸に込み上げる人の温かみに嗚咽が止ま

らない。

暫しの間、少女は毛布に顔を埋め涙を流していた。

後にリリスの判別手段となる手配書を作成可能とした一つの出来事をここで上げよう。

リリスという存在が神の掲示によって世に知らしめられてから、およそ100年ほどすぎた頃。

ある国の処刑人ドハツガーは法律という裁きの名のもとに、命令されるがままに多くの人間を処刑してきた。

それが彼の仕事であり生活基盤であったからだ。

彼は罪人の首を大斧で切り落とす斬首刑の役人だ。

ここ数年、似たような容姿の少女達が集められると、まとめて公開斬首刑にしてきた。

リリスを探すのには口頭で広がった容姿の特徴だけが頼りなのである。

この国では怪しきは全て罰せよとしている。

その為どこか一部でも似ているなら処刑する事に決められていた。

反発は即死罪。

徹底した決まり事であった。

その日も彼は少女達の怨念を断ち切るように斧を振り下ろしていた。だが、一人の少女を見たとき、彼に緊張が走った。

確かに自分は一度この娘を殺している。

それは直感的なものだった。

確たる証拠も記憶も無い。

ただそう思えるだけであった。

彼は何百もの同じような顔の少女を処刑してきた。

どの娘も泣き叫び許しを願ってきた。

それがたまたま罪悪感とともにこの奇妙な感覚になっただけだ。

そう自分を誤魔化しいつものように少女の首を切り落とすとした。

その日にその感が取れることは無かったが、日を追うごとに徐々に

薄れていった。

そして二年たったある日。

いつものように斬首台に、数人の少女達が連れてこられた。

何気なく少女達を見たときドハツガーは凍りついた。

と同時に脂汗がだらだらと体中から噴き上げて来た。

そこに三度目になるだろう少女の姿を確認したのだ。

二年かけて薄らいだあの奇妙な感覚が鎌首を擡げて自分の中で大きくなってゆく。

それは体中の器官に命令を出す・・・とても危険なのだ。

そしてその感覚が頂点に達したとき、ドハツガーは頭の中が真っ白になった。

次に気が付いたときには手にもった斬首用の斧で一人の少女をわずかに切り裂いていた。

無意識に体を支配した、その奇妙な感覚とは恐怖という名の本能だった。

かくしてドハツガーより事情を聞いた国の宰相たちは、すぐさまその娘の顔を似顔絵にし、世界中に配ったのだった。

こうしてリリスの存在は確定し、世界中で誤認されて殺される少女は皆無となっていった。

蛇足であるが、ドハツガーはこの日を堺に処刑人を辞職している。

以来、毎日教会で祈りをささげていたという。

自分に与えられた運命を呪っているのか、それとも懺悔しているのかそれは誰にもわからなかったという。

「レディンさん、おはよう！」

「おはようございます勇者様。」

「クレイオ様、おはようございますう！」

「よう！いい朝だなレディン！！！」

朝の大通りは賑やかだった。

見知った人が顔をあわせるたび、にこやかに声を掛けてくれる。

「みんなおはよう。今日もいい天気だな。」

レディンもにこやかに挨拶を返す。

「今日はどこに出かけるんだい？」

店の前を通りかかったとき、パン屋のおばさんが焼き立てのパンを放り投げながら聞いてきた。

「つと、ありがとう！今日から1週間ほどバルディオス山脈に遠征なんだ。」

「ええ！？じゃあもしかして火吹竜の所か？」

パン屋の横の靴屋の親父さんがビツクリした声を上げる。

「ああ、中々の大物らしいんで早く退治しないと。皆困ってるしね。」

「にっこり微笑んで言うレディン。」

「そんな危険な怪物相手に一人で行くきかい！？」

「今回はちゃんと仲間と行くよ。信頼できる頼もしいのがね。あいつらがいれば大丈夫。」

レディンは力強く言った。

その言葉は自信に満ち溢れ、聞くものを納得させる。

「いやあ！ウチの勇者様は頼もしいねエ！！！」

「ホントだな。おかげでゆっくり話しても出来やしねエよー！」

ちくしょーつと悔しがる親父さんを、無理言うもんじゃないよ！とおばさんが叱る。

「ははは。有難うございます。そう言ってもらうと嬉しいよ。それじゃ。」

レディンはそう言うと軽く手を振ると歩いていった。

「イイヤつだよなあ！」

「本当に。私たち自慢の、いや街上げての大出世人だよ！」

二人は誇らしげに語り合うのだった。

レディンの噂は急速に広まりつつあった。

13歳という若さで、世に名を馳せる騎士国家バイトンの騎士隊に名を連ねた。

が、17歳になると突然騎士隊を除隊、その後フリーの傭兵へと転向した。

以来、傭兵ギルドに所属することになる。

しかし、レディンが望んで請け負う仕事は報奨金が少ない割に危険な物ばかりであった。

ギルドに依頼してくる人は様々だが、中には貧しい人々の悲痛な訴えもある。

現在この世界には魔族が闊歩している。

幸い軍団として成り立っている数は少なく、各国の軍事力で抑えることは可能だった。

しかし、軍団とは別に個別で人々を襲う魔族の方が圧倒的に数が多い。

中規模な町ならば自警団や隣国の騎士団などで迎撃する事も出来るだろう。

しかし、点在する小さな村ではそれも無理だった。

残された道は少なく、近隣国からの助けを待つか、高い報奨金をだしてギルドから傭兵を派遣してもらうか、なすすべも無く魔族に蹂躪されるのを黙ってみているかである。

レディンはそんな人々の依頼を率先して請け負い、圧倒的な強さと早さで解決する。

時には無償でギルド以外の個別依頼も受けている。

貧しい人々の前に颯爽と現れ悪を打つ。
何時しか彼等はレディンの事を勇者と呼ぶようになっていた。

レディンは街のはずれにある一軒の小屋に脚を運んだ。

「クロノスいるか？」

木製のドアをノックするが返事はない。

「おかしいな出かけてるのか？約束の時間に来たって言うのに・・・

」
そういつてドアを開けた瞬間何物かが切りかかってきた。

しかし、レディンは焦ることなく剣をすばやく抜いて剣戟を受け止める。

「まったく、可愛げのないやつ。少しは慌てるとか、ビックリするとかないのか？」

「これから出かけるんだ、冗談事しないで早く支度をしてくれ。」

「はいはい。あいかわらず面白くないヤツだなあ。久々のご対面だつて言うのに。」

うんざり顔のクロノス。

「そうか・・・あれから一年になるんだな。」

「ああ、お前が調子に乗って西大陸の魔族討伐になんか行くからだ。」

「まあ、良いじゃないか生きて帰ってきたんだから。」

「これが戦場では魔族にまで恐れられた『青き閃光』かよ。」

呆れ顔のクロノス。

「そんなの勝手に皆が呼んでるだけだよ。俺よりすごい人は沢山いたよ。」

青竜騎団のナインブレード様なんか名前の通り九つの刃で攻撃してるようだったんだ！」

レディンはそのときの興奮を思い出したのか拳に力が入る。

「ま、積もる話は旅の道中で聞くよ。」

「・・・そうだな。長旅になるだろうし、早く行かないと困ってる

人達が可愛そうだ。」

「今度のヤツはバルディオスの・・・ドラゴンだよな？」
一筋の汗がクロノスの額をつたう。

「ああ、体長5mほどの小物だけだな。火を吹くんでやっかいなんだ。」

「小物でもドラゴンだぜ?!出来れば相手にしたくねえな。」

「じゃあ、残れば良い。」

「そうは言っていないだろ。まったく、相変わらずいぢわるな奴だよな。」

「ふふふ。」

「もう、支度は出来てるさ。じゃいこうぜ!つてもう居ねえ!?!」
レディンは背を向けてすたすたと歩き始めていた。

「待ってっばおい!つたくしよがねえ自分勝手なヤツだな。」

クロノスはそうボヤキながらも嬉しそうにレディンの後を追いかけて行くのだった。

The night before the festival

夕日に空が紅く染め上げられる頃。

さらに赤く染め上げられた空間があった。

噴出される轟炎に、飛び散り滴り落ちる血の色に赤く赤く染まりゆく。

丸太のように立派な四肢は骨まで達する斬撃を受け続け、もはや自重を支えきれず、惨めに地に伏せることしか許されなかった。

2 mを超える長身で筋肉質の男が獲物の首筋に己の身長より長く、幼子なら隠れてしまうような巨大な鉄槌を打ちつける。

あまりの重圧に耐え切れない皮膚は鉄槌の形に凹み、すかさず噴水のようにおびただしい紅い体液が噴出する。

びりびりと肌を感じるほどの獲物の咆哮は麓の村まで聞こえたのはなかるうか。

腹の底に響く重々しく、生理的嫌悪感を抱く震声は、自分の命を奪おうとする者への呪言の様に思わされる。

その叫びも終わらぬうちに獲物の頭蓋を研ぎ澄まされた一撃で打ちぬく。

二度目の咆哮は長く弱弱しく、最後には途切れてしまった。

レディンとクロノス、そして麓の村で合流したゼスとハウデスの四人はついに火竜を倒した。

服や鎧のあちこちは焼け焦げ、細かな傷や打身などはあるものの四人とも五体満足であった。

レディンは断末魔の主である体長6 mの火竜の二本在る角を切り落とし、そこで一つ安堵の息を吐いた。

驚異的な竜の生命力は侮れない、倒したと勘違いして油断すると致命的な反撃を受けることもある。

本当に絶命したか確認してからでないとい気を抜くことは命取りに為る。

切り落とした角は退治した証しとして持ちかえる。

また、竜の角は貴重な資源として有効活用出来る。

粉末にしたものを漢方薬と混ぜて飲めば強壮薬に、魔導師の実験材料に、聖者の儀式に用途は様様だった。

角の長さは50cmほどで直径は5cmはある。

これを二本専門店に売りさばけば一ヶ月は遊んで暮らせるだろう。

もともと依頼中の儲けは仲間と等分するため、装備一式の支度に打ち上げの酒場の飲み代やほとんど失われるだろう。

その作業を見ていたクロノスはつい先ほどの戦闘も何のその、元氣よく先頭をきつて麓の村へ続く山道を降り始めた。

そんなクロノスを微笑みながら残る3名も後に続いた。

麓の村ではすでに村を上げての祭りの準備であわただしかった。

四人は早速村長に報告しに行くことややはり火竜の断末魔がここまで聞こえており、すぐさま祭りの手配をしたのだった。

そして礼を兼ねて祭りにも是非参加して欲しいと願い出られた。

断る理由も無い四人は快く承諾した。

祭りは翌日の正午に始まるとのことなので長老の用意した部屋で各自休養についた。

その深夜。

レディンはふと外の騒がしさに目を覚ました。

騒がしいといっても長老の館自体がかなり物静かな為、話し声だけでも注意すると聞こえてくる。

別に隠れて聞き耳を立てる趣味は無い。

もし困り事なら力になろう、そんな軽い気持ちでドアを開け長老の元へむかった。

長老の元には村の男数名が集まっていた。

男達はしきりに長老に訴えていた。

声を掛けて話を一緒に聞いてみると、今日の夕方森の辺りでリリースを見たという。

リリースの存在が世界中に知れ渡って数百年。

昔はごく一部の地域でしか目撃されなかったリリスも数百年もかけ世界中を移動していたためにその知名度もあがっていた。

手配書は一定時期に描きなおされたものが世界中に再配布されており、初めてみる者でも発見することはたやすかった。

長老は祭りの後にも山狩りをするということで村人達を帰らせた。長老はリリスに対して特に危機感を持っているようには見えなかった。

またレディンも大して気にとめなかった。

だいたい、神を嫌うわけではないが、見たことも無いものに信仰し、命をささげるなど馬鹿らしい。

信じられるのはこの世界で生きている自分達の力であるという信念があるからだった。

だが、このリリスというマツリゴトには不愉快の念を隠し切れなかった。

否定論者ではなく、無関心なだけである為たいした衝突も無くすごしてきたが今回はそうはいかなかった。

そもそも神の掲示したという災いとは何か、疫病、飢饉、戦争……すべて人間が生活していれば起こりうる事象である。

それをひとつの存在があるためだなど、到底納得できるわけがない。レディンには人の意見に流されない確固たる自分の納得できる理由がなければただの戯言にしか思えなかったのだ。

自分の目で見、触り、体験してこそ初めて自分の中で知識として確定されてゆくのである。

レディンは少し熱く考えている自分に冷静になり、眠りついた。

目が覚めると何やら外の喧騒がかすかに聞こえてくる。きつと祭りの準備の追いこみに入っているのだろう。

レディンはベッドの上で覚醒したまま、何をするわけでもなく目を閉じていた。

ふとリリスの話しが頭に浮んできたからである。

昨晚この村付近で目撃されたリリス。

手配書を見る限り、普通の少女であった。

突如現れた神に、災いの根源と掲示された当時、一体何があったのだろうか。

数百年たった今残されている文献と代代受け継がれる口伝の情報は、どれも通達途中で尾鱗の付いた信憑性にかけるものと思われる。

ただ、いくつか確実に共通するものがあった。

掲示を残した神は光の神で唯一度だけ出現したとされる。

リリスは其の存在自体が災いを呼ぶ根源であると。

そして、幾度と消滅、それこそ骨まで焼き尽くしても、しばらくの後必ずこの世界のどこかに蘇ってくる。

神は何ゆえこの少女にこのような過酷な運命を与えたのか。

運命は自分の力で運ぶ命だと常々言い聞かせてきたレディンだが、リリスに関しては他人に運ばれる命と称しても過言ではない。

この少女は自分で人生を選ぶ権利を剥奪され、生きる事も死ぬ事も他人任せなのだ。

人間達は未知なる恐怖から逃れ、安心を得るために安易な行動に出ただのだ。

自分がよければ犠牲を厭わない。

禁忌とされる事さえも平然と破り継続させる。

何と理不尽で。

何と傲慢で。

何と無様な。

今まで自分が命と生涯をかけて守ろうとしている人間という生物がこれほどまで愚かで滑稽だとは。

レディンの中で初めて人間に対して嫌悪感が産まれた瞬間であった。

「今日の勇者様はなんて顔してんだ……？」

そう語り掛けられたレディンはゆっくりと瞼開き、声の聞こえた扉付近に目線を送る。

「クロノスカ……おはよう……」

何の感情も無く命令された機械のように言葉を吐き出す。

「まったく……昨日は眠れなかったのか？ 酷い顔してるぜ？」

怪訝な表情を隠しもしないクロノスは声の調子を落とし真面目に質問する。

「そうなのか……？ しばらくすれば大丈夫さ。」

レディンに特に変わりはない。

ただレディンの中に先ほど産まれた感情はしこりの様に消えることは無かった。

「ん。まあまだ祭りの開始まで時間が有ることだし、顔でも洗って飯でも食えば元気も出るだろ。」

完全に納得したわけではないが、本人が言うのなら仕方が無いといった様子でクロノスが言う。

「ああ、そうだな。そうするとしよう。」

そう言うレディンはベッドから降り立ち身支度を整えた。

二人そろって食堂まで出向くとそこにはすでにゼスとハウデスが席についていた。

すでに二人とも朝食は済ませたようで飲み物を啜って寛いでいた。

席につくと屋敷の使用人が二人分の食事を運んできた。

しばらく無言で食事を摂っているとハウデスが口を開いた。

「わたしたちはー、このあとー、すぐにー、しゅっぱつしますー」

にこやかに微笑みながらひどくおっとりした口調でハウデスが言う。

「……………」

無言でうなづくゼス。

「・・・そうか。次ぎはどこに行くんだ？」
出会いと別れは何時もの事。

彼らのような傭兵は仕事をするのが生活のようなものだ。

仕事の終わりが次ぎの仕事の始まりなのだ。

「つぎはですねー、このバルディオスからー、しばらく東向こうのー、ボルテス渓谷にー、行くんですー」

ボルテス渓谷とは大小五つの渓谷が連続して蛇のように横たわる場所
ので鉱脈が多いことで有名だ。

「・・・」

無言でうなづくゼス。

「ボルテスって言やあ、小鬼賊の事件かあ？」

日ごろ情報収集が趣味だと公言しているクロノスが顔を顰めて言う。

「そうなんですー。最近すみついたらしくー、鉱脈に悪さをするのでー、困ってるそうなんですー」

「しかし、小鬼程度なら自警団程度で追い払えるんじゃないのか？」

小鬼とは大きくても体長1mほどで身のこなしが素早く、肉食のためよく家畜などを襲って迷惑をかける魔属である。

しかし、4、5匹程度で群れなければ人前に姿を現すことも無いほど臆病者で力も成人男性程度である。

「小鬼賊っていったらどう？しかもかなり大きいらしいぞ？」

「ああ、そういうことか。」

小鬼賊とは小鬼達がさらに一つの集団を形成し集団行動を行い、盗賊の真似事を行うことを指す。

「ええーその数ーざあつと600匹くらいなんだそうですー」

「げっそんなにいるのかよ！俺だったら願ひ下げたいねー」

「異常な数だな。騎士団を四隊・・・それも熟練した隊を呼ばないと駆逐できそうにないな。」

「ああ、軍隊動かしてもいいくらいだぜ。」

騎士団とは常に20名ほどの騎士達で形成される集団戦の専門家だ。

その中でもかなり熟練した部隊を4、5隊用意しないと6000もの小鬼を相手にするのは辛いだろう。

普通の人間を6000人相手に勝てるようではなければ、まず話にならない。

部隊同士の混乱をおこすのも致命的に成りかねない。

お互いの役割分担を理解しきった熟練の騎士団同士で無いと振り返り討ちにあうだろう。

「そうなんですー。私達はー騎士団の補助に当たる役割なんですー」

「そうか。がんばってくれ。また、会おう。」

「おう！死んだら唯じゃおかねーからなっ！！」

「はいー。おたっしやでー」

「……………」

こうして4人で最後の朝食を摂り終えた。

Return

昼に始まった祭りは夜中まで続き、その間主賓であるレディン達は村人達から感謝の言葉をかけられ、

酒を振舞われ、料理を運ばれ、若い年頃の娘達に興味本位な質問攻めに合い、結局祭り終了までゆつくりと休む暇も無かった。

翌日、疲れのためか昼過ぎに起床し、村を出発することになった。

「んあー・・・これからどこにする？いったんダイオージユに帰るか？」

欠伸をかみ殺しながらクロノスが言う。

ダイオージユとはクロノスとレディンが拠点としている街の名前である。

「とりあえず、装備やら道具やら一式揃えなおしたいから、ダイタンスリに寄ろう。」

ダイタンスリはここジーク村からダイオージユの中間地点に位置する中規模な街であり、旅の仕度をするには十分な活気のある発展途上都市だ。

そしてダイオージユとダイタンスリは姉妹都市でもあり、街の雰囲気もよく似ている為、レディン達は好んで利用することが多かった。

「ダイタンスリかー少々だな！山猫亭のおばちゃん元気してるかな・・・きつと相変わらずでさえ声で怒鳴り散らしてるんだらうな。」

懐かしそうに苦笑するクロノス。

ダイタンスリの『臆病な山猫亭』といえば、昼は安くて美味しい食堂、夜は傭兵や冒険者の集まる居酒屋として少しは名の通った店である。その女将は豪快で気さく、傭兵にも偏見もたず、自分の店に来るものには別け隔たり無く接してくれるので皆に慕われている。

時として傭兵や冒険者達は一般人から疎ましく思われる場合もあり、女将の自然な態度は心身疲れきった彼らに安らぎを与えてくれるのである。

「そうだな。久しぶりに顔をだしてみようか。」

レディンも女将の姿を思い出し微笑するのだった。

バルディオスのジーク村から四日、レディン達はダイタンスリに着いていた。

道具屋で竜角を売り、必要な品物を一式揃えた二人は『臆病な山猫亭』で休息を取っていた。

「品薄なときに売れるなんてツイてたなあ！」

「ああ、市価の2倍近くの値で買い取ってくれたからな。」

「ありがたいこつた。こうしてエールをガンガン飲んでも金の心配しなくて良いんだからな。」

そういつて喉を鳴らしながらジョッキを空にしたクロノスは更に追加注文をした。

「ゼス達にも分けてやらないと」

「いいっていいて！あいつらは現在作事中。お金も入ってウハウハだ。」

「しかしだな・・・」

「あああ！お前は真面目過ぎるんだよ！！二人に渡すつつつてもたかだか飲み食い数回分じゃんか！」

「金額の問題じゃないだろ。」

「そこが真面目だってーの。もともと価格が上がることを前提に分け前をやらんだろうがっ！！」

「それはそうだが・・・」

「だろ？ならいいんだよ。今度有ったときに酒でもおごってやるくらいでいいんだよ。」

「ん・・・そうだな。」

レディンはしぶしぶ納得したようだった。

『おい、きいたかよ？バルディオスのジークでリリースが見つかったんだとよ！』

『本当かよ！？で、つかまったのか？』

唐突にレディンの耳に流れてくる近くの若者達の世間話。

『ああ、村長が辺り一帯を山狩りして見つけたらしい。連れ帰ってリリースだと確認されてから打ち首にされたそう。身体は燃やして首はさらしものだってよ。今朝村から来た奴に聞いたから間違い無しだ。』

『あそこは火竜も倒されたって話だし、リリースも殺したってんだつたら言うことなしだな。』

『まったく。人類に幸あれ．．．ってか？』
軽快に笑う客達。

「．．．俺達のいた村の話だな。」

渋い顔をしているレディンにクロノスが言う。

「ああ。祭りの前の夜そんな事を村長達が話していたよ。」

レディンはそういつてエールを飲み干した。

「．．．戻ってみるか？」

じつとレディンを見つめるクロノス。

「なぜだ？」

答えた声が低いことにレディンは気がついてクロノスから目をそらす。

「そうか．．．あの朝お前の態度が変わったのはそう言うことか。」

「．．．．．」

「ほんつ．．．とに真面目だな。伝承なんかで、聴く、だけのリリースが納得いかねえんだろ？それに事が事だけに．．．言ってみれば人殺しだしな。」

「．．．そのとおりだ。」

「ま、あいつ等は感覚が麻痺してるか洗脳されちゃってるからよ、人殺しなんて思ってないだろ。畜生殺すのに裁判沙汰で有罪にはならんからな。」

「．．．．．」

「よし、決まりだ。早速行こうぜ！馬を借りれば丸一日でいけるだろ。」

「．．．お前もいくのか？」

「悪いかな？」

「いや……べつに……」

「そんな顔したお前をほっとけないって事にしとけ。」

「そんなに酷いのか？」

「ああ。今なら魔王も逃げ出さず。」

「……すまない。ありがとう……よし、行こう……」

二人は女将に軽く挨拶すると店をとびだしていった。

Tragedy

其処には頭首だけがさらされていた。

レディンより少し年下にみえる少女の。

それが古ぼけた木製机の上に無造作にさらされていた。

ここはジীগ村入口。

この村に訪れた者に、必ず目に付く場所だ。

少女の顔は一見安らかに見える。

だが、最後の苦痛が迫るその瞬間を耐え忍んだ眉間の皺がはつきりと残っていた。

「こりゃあ・・・リアルだな・・・」

クロノスは真妙な面持ちでつぶやくとそれきり口を閉ざした。

どこからどう見ても唯の少女の生首でしかない。

リリースだと言われても、やはり人間とまったく同じ姿形をしていては、与えられる印象は同族殺しでしかない。

「・・・・・・・・・・」

レディンはただ黙って少女の亡骸を見据えるだけであった。

その表情は驚くほど無感動で無表情であった。

幾分が時が流れて、村の者が見まわりに来たのだろう、レディン達に気がついて小走りで近寄ってきた。

「ああ！勇者さん！いったいどうしたんですか？」

二十歳前後の青年が、晴れやかな笑顔で語りかけた。

「何か忘れ物でもしまし・・・ひっ!？」

レディンの顔を覗き込んで息を呑む。

笑顔がたちまち恐怖にゆがんだ。

青年に向けられたレディンの眼光は殺気を孕んでいたからだ。

野獣に睨まれた獲物のごとく竦み上がる。

「村長は・・・どこにいる？」

一歩、青年に向き直る為の唯一歩だけ、レディンが足を動かしただ

けで青年はその場にへたり込んでしまった。

「あ……あ……家に……」

直感的に自分が殺されるのではないか、という恐怖心の為うまく呂律がまわらない。

更に真正面から当てられた殺気の為、脚が震えて立ち上がることも出来なかった。

「そうか……」

それだけつぶやくとレディンは青年などお構いなしに村長の家に向かって歩いて行ってしまった。

クロノスもちらりと青年をみたが、何もせずレディンの後についていった。

依頼完了後に宿泊した長老の家まで最短距離で進む。

「これはこれは勇者さま、いかが御用で？」

村長の家につくなりすぐさま村長に対面をした。

「何故殺した？」

低いトーンのレディン。

「ころした……？ああ、リリスの事でございますかな？」

長老は一瞬何事か思案したが、殺すという単語で結びつくのは其れだけであった。

「そうだ。なぜだ？なぜ殺したんだ？」

怒鳴り散らすわけでもなく、静かな口調だった。

「なぜと申されましても、神様の啓示と代々村に伝わる言い伝えにしたがったまで……。それが何か？」

村長はレディンが問いたただす姿を訝しげに見ながら答えた。

「何かだと？村長、貴方は村ぐるみで人を殺したんだぞ？」

「これは面妖な事を。たしかに姿形は人間に類似しておりますが、アレはリリスですぞ？」

その言葉に怒りを露にするレディン。

「リリス、リリスというが、彼女の何処がリリスなんだ？！

村人を襲って殺害していたのか？

町一つ廃墟にでもしたのか？

答えてみる村長！

貴方が彼女をリリースだと判断したのはどんな方法だ！！」

レディンの剣幕にたじろぎながらも村長は答える。

「手配書の特徴と、村の周りの山の中で隠れて暮らしているという不信な所・・・」

「ただそれだけなのか？！

何処の誰が決めたか定かではない手配書の特徴と似ていたから？

他人の空似だっただけじゃないのか？

何処かで野盗にでも襲われ山の中にたまたま逃げ込んだだけじゃないのか？」

「そ、それは・・・」

言いよどむ村長。だがレディンは止まらない。

「彼女は、自分で自分をリリースだといったのか？

命乞いはしなかったのか？

泣いて叫んで殺さないでくれと懇願しなかったのか？！」

「・・・」

村長は処刑のときを思い出しているのだろう。

レディンが言うような情景がその場では確かに起こっていたのだろう。

「それなのに貴方は殺したんだぞ！

確定したものが一つも無いのに、ただ思いこみで一人の少女を殺したんだ！！」

「・・・レディン！！！」

クロノスが一喝する。

「そのぐらいでもうやめとけよ。」

ひどく穏やかに優しく諭すような口調。

「・・・」

「すまなかつたな村長。

こいつは人間を守るために今まで辛い戦場を乗り越えてきたんだ。

魔属、怪物といったものから弱い人間達を守る為に自ら危険に身を投じてきたんだ。

それが、リリースなんて不確かな伝説だけで同族殺しを、人殺しを正当化している。

それがこいつにとって納得いくわけが無い、許される出来事じゃないんだ。

だから、ここまで熱くなっちまう。

だがな、村長。

村を治めるあんたが軽率な行いをしちゃいけない。

伝説や、言い伝えを丸のみしちゃいけない。

そこだけは解つてやってくれ。」

「……………」

村長は押し黙るしかなかった。

自分たちの行いが悪いものだったと認める訳にはいかない。

認めたが最後、村中の人々が犯罪に手を染めた事になるからだ。

だが、レディン達の言った事もまた認めざる得ない事だった。

手配書の似顔絵は媒体となっている紙自体が古く、色あせていた。

”よく似ている”という曖昧な判断を取ってしまったのも確かだった。

そして村人の猟奇的に興奮した雰囲気に流され、ろくな査問会も設けず処刑した。

レディンの言うように盗賊にさらわれ、逃げ回っていた者だったかもしれない。

だがもう遅いのだ。

村長が後悔しようと、謝罪を述べようともし殺めた命は戻らない。

「いくぞレディン。じゃあな村長。迷惑かけたな。」

クロノスに促され部屋から出ていくレディンを、村長は黙って見送る事しかできなかった。

前回とは違い、村を後にするとき一人の見送りも居なかった。

入り口には腰を抜かしていた青年の姿は無かった。

ジীগ村からしばらく離れた林の奥で二人は馬から降りた。

「このへんでいいだろう。」

「そうだな。」

村を出るとき黙って持ち去った少女の首を葬ってやる為である。

レディンは布に包まれた少女の首を優しく側に置くと、

腰に携えてあつた剣を抜き、地面に向け構えた。

「はあっ!!」

気合一閃、数十歩先の地面が爆音をあげて吹き飛んだ。

自己に流れる氣を凝縮させ剣にのせて放つ、氣劍術と呼ばれる武術の基本技である。

そこには大人が入り込めるほど深い穴が開いていた。

そこにクロノスが首をいれる。

あとは二人でやさしく土を盛ってやった。

「気が済んだか？」

「………すまない……俺は………」

「気にすんな。俺もお前の姿を見たから冷静になれただけだ。俺一人でアレをみてたら、どうなってただろうな。怒りに身を任せて村長達を殺してたかもしれない。」

いつものおどける様な口調はなく、失笑をもらしていた。

「……俺は……もうわからない。命を懸けて守ってきた人間が信じられない………」

「おいおい！村長たちがそうだとしても、全ての人間が信じられないなんて思つてやしないだろうな!？」

「……全部だなんて思つてないさ!! だけど……この人間はどうだろうって疑いが生じてしまうじゃないか!!」

俯き、摩擦音が鳴るほど齒を食いしばるレディン。

「お前はいま、つかれてるんだ。すこし仕事を休んでゆっくりと考えてみる。」

「……そうかもな……そうしたほうがいいな。」

そう想いたい、だが、こんな悲劇がもし、もう一度起こるなら……

レディンの頭からその考えが抜ける事は無かった。

Cowardly LYNX Arbor

ある日の臆病な山猫亭。

この店は昼は食堂、夕方から夜半にかけて酒場となる。

夜もふけた頃、女将の人柄を慕つての常連客と、美味しい料理を出す店と評判を聞きつけた客とで大いに賑わっていた。

此処の女将は元傭兵で、現役当時は《怒れる山猫》と異名が付くほどの実力者であった。

本人は”女に付ける呼び名じゃない”と嫌っていたが、名は体を表すと言うごとく、対戦闘での彼女の動きをよく表現できていた。

瞬発力を生かした、猫型の肉食獣のしなやかで素早い動きに、トドメを指すまで気を抜かない用心深さ。

誰が初めに呼んだのか、山猫とはよく言ったものだった。

ところが、ある依頼実行中に事故に遭い脚を痛め、現役を引退したそれから暫くして、伴侶と共にこのダイタンスリで店を構えたのだった。

人々の活気と喧騒の中、店の片隅で傭兵風の男達が酒を酌み交わしながら話をしていた。

「また、リリス狩りに出た奴らが殺られたらしい。」

「殺されたあ？どうやって？」

「最初は村人20名ほどで山狩りといった感じだったそうだが、長い間追いまわしてるうちにリタイア続出だったらしい。」

「へえ、軟弱者が多いこつて、わはは！」

「まあ、結局最後まで残った4人でしつこく追いまわしてたんだと。」

「4人が・・・まあイケるんじゃないの、普通？」

「ああ、たぶん大人4人だったら問題ないだろうと、諦めて帰った連中も思ってた見たいだ。」

「でも、結局・・・？」

「そう、幾ら待っても帰ってこない4人を翌日搜索したんだと。何とか見つけれられたんだが、全員クビをはねられて死んでいたんだぞうだ。」

「へえ、怖いねえ・・・じゃあ今度のリリスは剣をもってるんだ？」

「2年前ジীগ村のトコで殺ったときはそんなの持ってるどころか、反撃も抵抗もなかったぞうだぜ。」

「じゃあ、別人の・・・しわざか？」

「ああ、そう言う可能性があるってことさ。もしかしたら殺し屋に遭遇しただけかもしれない。まーこれは無いだろうがな、ははは。」

「そりゃ、ありえねえ！わはは。しかしリリスに肩入れするんなら、どこの大ばか者だ！」

「手配書じゃイマイチらしいが、実物は結構な美少女らしいぜ？」

「色香に惑わされて、不意打ちでバツサリ・・・なんじゃねえの？」

「わっはははは！そーかもな。」

「そうそう、お前聞いたか？」

「何がだヨ？」

「西方大陸の魔族討伐で有名なナインブレード様の国が陥落したって話さ！」

「ああ、どうやら内部の者がクーデターを起こしたらしいな。」

「近々ナインブレード様が逆襲をかけるって話らしいぞ。」

「へえ、じゃあ、囚われの姫を救出するナイトの登場ってワケだ！」

「くううう燃える展開だなあ！！！」

男達の話は別の話題へと変わっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1168ba/>

リリース -戒-

2012年1月3日02時52分発行